

## 布田川・日奈久断層帯の活動履歴調査

## Paleoseismological studies on the Futagawa-Hinagu fault zone, central Kyushu, western Japan

# 吉岡 敏和 [1]; 新谷 加代 [2]; 家村 克敏 [2]; 宮脇 理一郎 [2]

# Toshikazu Yoshioka[1]; Kayo Shintani[2]; Katsutoshi Iemura[2]; Riichiro Miyawaki[2]

[1] 産総研 活断層研究センター; [2] 阪神コンサルタンツ

[1] Active Fault Research Center, AIST, GSJ; [2] Hanshin Consultants Co.,Ltd.

<http://staff.aist.go.jp/yoshioka-t/index.html>

九州中部、熊本県に位置する布田川・日奈久断層帯は、政府の地震調査研究推進本部が基盤的調査観測対象断層帯の1つとした断層帯で、阿蘇火山付近から西南に延びる布田川断層と、北北東-南南西から北東-南西走向にのび、八代平野の東縁から八代海に至る日奈久断層から構成される。このうち布田川断層ではこれまでに熊本県益城町田中地区においてトレンチ調査が、日奈久断層ではこれまでに御船町高木地区、氷川町高塚地区および氷川町柵地区においてトレンチ調査が実施され、それぞれにおいて過去の活動時期についてのデータが得られている(熊本県, 1996, 1998; 原子力発電技術機構, 1997, 1998)。しかしながら、平成14年5月に地震調査研究推進本部地震調査委員会から公表された長期評価では、高塚地区における調査結果に二通りの解釈なされたため、今後30年間に活動する確率はほぼ0から6%または0.03から2%と、十分に限定されないものとなった。これを受けて産業技術総合研究所では、平成18年度文部科学省からの委託により、布田川・日奈久断層帯の活動履歴調査を実施した。

布田川断層では、益城町田中地区においてトレンチ調査を実施した。この地点は1995年の熊本県の調査地点に隣接しており、県の調査で確認された断層の延長線上で2本のトレンチを掘削した。掘削の結果、壁面にはAso-4火砕流堆積物と、その上位の砂礫層を変位させる明瞭な断層が観察された。断層面は高角度でやや南に傾斜し、東側のトレンチでは見かけ上南側隆起の上下変位を有している。

日奈久断層では、城南町鱒瀬地区と宇城市(旧小川町)南部田地区の2地点においてトレンチ調査を実施した。このうち鱒瀬地区のトレンチ壁面では、Aso-4火砕流堆積物とその再堆積層を変位させる明瞭な断層が観察された。また南部田地区では、ボーリング調査によりAso-4火砕流堆積物の上面に約20mの落差が確認されるとともに、トレンチ壁面では腐植質層を挟む地層が西に大きく傾斜しているのが観察された。